

## 平成25年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

高等学校（普通科）において特別な教育的ニーズを有する生徒を含む全ての生徒が望ましい職業観や社会への適応力などキャリア形成に必要な知識・技能を身につける新領域「キャリアエンカレッジ」に関する研究開発

### 2 研究の概要

高等学校（普通科）において一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援の在り方を追求し、発達障害のある生徒に「自立活動」の視点をもって、キャリア教育、生徒指導・教育支援にあたる新領域「キャリアエンカレッジ」の校内体制の確立を目指す。新領域「キャリアエンカレッジ」では各学年で自他理解を促し、勤労観、職業観など生き方を考えさせるキャリアガイダンス、就業体験学習や資格検定学習など体験的な学習を通じて、社会生活に必要な基本的ルール、個別のニーズに応じたスキルなどの獲得に効果的な指導・支援の在り方（ワーク・チャレンジ・プログラムやライフ・スキル・トレーニングなど）の研究を行う。また、支援が必要な生徒に対して関係諸機関との連携をさらに強化した支援体制の検討を進める。

この研究を通して、障害の有無にかかわらず、全ての生徒が社会的・職業的自立に必要な能力を育てることを目的とする。

### 3 研究の目的と仮説等

#### （1）研究仮説

平成21年度より取り組んでいる「高等学校における発達障害支援モデル事業」の研究を進める中で、明らかになってきたことの一つは発達障害の有無にかかわらずコミュニケーション能力不足や社会生活に必要な基本的ルールが十分に身につけていない生徒が多くおり、就労の場面で非常に困難を抱えるとともに、就労後も短期間で離職してしまうという課題が明確になってきたことである。今回の研究で新領域「キャリアエンカレッジ」を設定することで、

- ① さまざまな職業における基本的なルールを理解し適切に行動できるためのワーク・チャレンジ・プログラム（WCP）やライフ・スキル・トレーニング（LST）などを通じて一般社会で生きていくための知識やスキルを習得させるシチズンシップ教育を推進する。
- ② 体験的な学習では就業体験学習で実際の社会との接点を持ち、獲得した知識やスキルの定着を図る。また、資格検定学習で個別のニーズに応じたスキルを習得することで社会に生きる自信をつけさせる。
- ③ 生徒が相談を求める場所として新たにハローワークの就労支援ナビゲーターなどの外部人材の活用を図る。この相談体制では生徒が直接相談できだけでなく、担任教師も相談できるネットワーク的な就労支援体制の構築を目指す。この相談体制は学校を卒業してから実際の社会に生きていく場面で必要に応じて必要な支援が求められることができる力を育成する。

以上3点について特別な教育的ニーズを有する生徒（発達障害を有する生徒等）を含め、全ての生徒に特別支援教育の指導領域である「自立活動」の内容を指導・支援することで、

職業的・社会的自立に必要な能力を育成する。

## (2) 教育課程の特例

「総合的な学習の時間」の一部として、現在実施している学校設定科目「キャリアガイダンス」各学年1単位、「体験学習Ⅱ」第1、2学年2単位、「スタディガイダンス」各学年1単位を新領域「キャリアエンカレッジ」に統合し、その中に特別支援学校の指導領域である「自立活動」の内容を取り入れて再構成する。

## 4 研究内容

### (1) 教育課程の内容

「キャリアガイダンス」3単位（第1、第2、第3学年各1単位）、「体験学習Ⅰ」2単位（第1学年）、「体験学習Ⅱ」4単位（第1、第2学年各2単位）、「スタディガイダンス」3単位（第1、第2、第3学年各1単位）を設定し、その中で発達障害のある生徒に特別支援学校の指導領域である「自立活動」の生活上の困難を主体的に改善・克服するための知識、技能、態度及び習慣を取り入れていく。その中で「健康の保持」、「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「環境の把握」「身体の動き」及び「コミュニケーション」の六区分領域に含まれる項目を「キャリアガイダンス」の内容として適宜組み合わせ合わせて実施した。また、第1学年では入学直後の段階で生徒全員が精神科医、臨床発達心理士などの専門家と面談を行う「メンタルヘルスマ面談」を実施した。

「キャリアガイダンス」3単位（第1、第2、第3学年各1単位）では「将来の進路選択に備えて必要な知識を身に付けるとともに、自己の特性を理解」を学習した。評価は通年にわたり、生徒の個々の学習記録や授業態度・出席状況を基礎として行った。

「体験学習Ⅰ」では生涯スポーツ、日本の伝統・文化分野を主として体験学習を設定した。第1学年各2単位として「ニュースポーツ」「ベースボール」「トレーニング」「演劇」「絵画」「イラスト」「フラワーデザイン」「吹奏楽」「合唱」「手芸」「天文」「囲碁」「茶道」「和太鼓」「箏曲」「篠笛」「民謡」「珠算」の18分野を2期（内容によって1期）に分けて選択し学習した。評価は通年（2期）で、生徒個々の学習記録や授業態度・出席状況を基礎として行った。

「体験学習Ⅱ」（第1、第2学年各2単位）では体験的学習を通し、職業選択に必要な知識を身に付け、自己の特性を理解する態度を養うことを目的として、第1学年では就業体験分野「整備・工業技術」「美容」「保育」「福祉」「園芸・農業」「ライフ・スキル・トレーニング」の6分野、資格検定分野「手話」「木工」「保育音楽」「写真技術」「電卓基礎」「情報検定」「食物検定」「被服検定」「英語検定」「漢字検定」「ペン習字」「数学検定」「色彩検定」「日本語検定」の14分野を2期に分けて選択し学習した。評価は通年（2期）で、生徒個々の学習記録や授業態度・出席状況を基礎として行った。

第2学年では就業体験分野「保育」「福祉」「園芸・農業」「ワーク・チャレンジ・プログラム」の4分野、資格検定分野「手話」「木工」「保育音楽」「写真技術」「電卓基礎」「情報検定」「食物検定」「英語検定」「漢字検定」「ペン習字」「数学検定」「色彩検定」「日本語検定」の13分野を2期に分けて選択し学習した。また、一部の生徒が東京都立農産高等学校で「食品製造」「園芸デザイン」の講座を受講した。評価は通年（2期）で、生徒個々の学習記録や授業態度・出席状況を基礎として行った。

「スタディガイダンス」3単位（第1、第2、第3学年各1単位）では確かな基礎学力を身につけ、進路選択の幅を広げることで将来展望を持てる生徒を育成することを目的とし、始業時8時30分より10分間の学習として位置づけ、週5日×10分として履修した。

また、学校設定科目「キャリアガイダンス」による3年間を見通した系統的進路指導を学習面から補強することで、進路決定率の向上をはかるとともに、生徒が「わかった」、「できた」という喜びを実感し、「次もやってみたい」、「もっと学びたい」と自発的、主体的に学習する態度を育成した。

## (2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p>4月18日(月)第1回キャリアエンカレッジ推進協議会 キャリアエンカレッジの方向性について</p> <p>5月18日(水)第2回キャリアエンカレッジ推進協議会 本校における望ましいキャリア教育の在り方について</p> <p>6月20日(月)第3回キャリアエンカレッジ推進協議会 文部科学省視学官からの助言 キャリアガイダンス・体験学習・奉仕の組み合わせ方について</p> <p>8月17日(水)第1回キャリアエンカレッジ推進資料作成委員会 ライフ・スキル・トレーニング、ワーク・チャレンジ・プログラムについて</p> <p>9月16日(金)第2回キャリアエンカレッジ推進資料作成委員会 本校生徒の苦手領域について</p> <p>10月17日(月)第4回キャリアエンカレッジ推進協議会 第3回キャリアエンカレッジ推進資料作成委員会 キャリアガイダンス、ライフ・スキル・トレーニング、ワーク・チャレンジ・プログラムの年間計画について</p> <p>11月25日(金)第4回キャリアエンカレッジ推進資料作成委員会 教科の目標と評価について</p> <p>12月14日(水)第5回キャリアエンカレッジ推進協議会 第5回キャリアエンカレッジ推進資料作成委員会</p>
第2年次	<p>4月24日(火)第1回キャリアエンカレッジ推進資料作成委員会 キャリアガイダンス計画、ライフ・スキルトレーニング、ワーク・チャレンジ・プログラムについて</p> <p>5月2日(水)校内研修会 「高校生の意識調査」について</p> <p>5月22日(火)第2回キャリアエンカレッジ推進資料作成委員会 キャリアガイダンス(第1学年)実施状況報告、ライフ・スキルトレーニング、ワーク・チャレンジ・プログラムの進捗状況について</p> <p>6月22日(金)第1回キャリアエンカレッジ推進協議会 今年度の研究開発の進め方について</p> <p>7月2日(月)校内研修会 本校生徒の実態をふまえ、望ましい支援のあり方を考える</p>

<p><b>第2年次</b></p>	<p>7月3日(火) 第3回キャリアエンカレッジ推進資料作成委員会          キャリアガイダンス(第2学年)実施計画、ライフ・スキルトレーニング、ワーク・チャレンジ・プログラムの進捗状況について10月9日          (火) 第4回キャリアエンカレッジ推進資料作成委員会          キャリアガイダンス(第2学年)実施状況報告及び実施計画、キャリアガイダンス(第3学年)実施計画、ライフ・スキルトレーニング、ワーク・チャレンジ・プログラムの進捗状況について          11月16日(金) 第2回キャリアエンカレッジ推進協議会          これまでの研究成果について          12月7日(金) 中間報告会          第3回キャリアエンカレッジ推進協議会          2月12日(火) 校内研修会          学力のアセスメント          2月18日(月) 校内研修会          保護者とのかかわりと連携          2月20日(水) 校内研修会          特別支援教育コーディネーターの役割とリソースの活用、通常の学級における支援          3月21日(木) 校内研修会          キレル生徒への対応</p>
<p><b>第3年次</b></p>	<p>5月28日(火) 第1回キャリアエンカレッジ推進協議会          平成25年度研究開発実施計画書、指導助言事項、今年度の研究開発の進め方について          6月27日(木) 第2回キャリアエンカレッジ推進協議会          メンタルヘルス面談、拡大学年会、ライフ・スキル・トレーニング、ワーク・チャレンジ・プログラム、進路相談について          6月28日(金) 校内研修会          発達障害など特別な支援を必要とする生徒理解          8月2日(金) 第3回キャリアエンカレッジ推進協議会          アンガーマネージメント、ワーク・チャレンジ・プログラム、インターンシップ、進路相談(若サポ)について          10月13日(日) 日本LD学会ポスター発表          就労に向け「暗黙のルール」を身に付けさせる取組          10月30日(水) 第4回キャリアエンカレッジ推進協議会          ライフ・スキル・トレーニング、ワーク・チャレンジ・プログラム、スタディガイダンス、中途退学者未然防止及び中途退学者等への支援、入学前調査、解答処理能力調査(長所発見)、研究開発学校指定期間延長希望について</p>

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
<p>第1年次</p>	<p>体験学習に関する教職員アンケート            体験学習に関する卒業生アンケート            本校生徒の苦手領域について            キャリアガイダンスの年間計画、目標と評価方法について            ライフ・スキル・トレーニングの年間計画、目標と評価方法について            ワーク・チャレンジ・プログラムの年間計画、目標と評価方法について</p>
<p>第2年次</p>	<p>キャリアガイダンスの評価は通年にわたり、生徒の個々の学習記録や授業態度・出席状況を基礎として行う。            キャリアガイダンスに関する生徒アンケートによる評価            校内研修に関する教職員アンケートによる評価            ライフ・スキル・トレーニングではT T A P 評価尺度を用いた自己評価、教師評価            ワーク・チャレンジ・プログラムでは評価項目として「出勤、挨拶、身だしなみ、報・練・相、作業態度、作業遂行」27項目2段階で自己評価と教師評価</p>
<p>第3年次</p>	<p>キャリアガイダンスの評価は通年にわたり、生徒の個々の学習記録や授業態度・出席状況を基礎として行う。            校内研修に関する教職員アンケートによる評価            ライフ・スキル・トレーニングでは自己評価、教師評価            ワーク・チャレンジ・プログラムでは評価項目として「出勤、挨拶、身だしなみ、報・練・相、作業態度、作業遂行」27項目2段階で自己評価と教師評価            スタディガイダンスの評価は授業ごとの学習記録や授業態度・出席情報を基に評価を行う。            ワーク・チャレンジ・プログラムにおいて昨年度履修した生徒に対して定着度の評価</p>

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### ①メンタルヘルス面談

メンタルヘルス面談及び事後の専門家を交えた会議により、「早急に教師間で情報を共有し、対応した方がよい生徒」「行動を注意深く見守る必要がある生徒」「学校生活がうまくいくように見守る必要がある生徒」を見いだすことが可能となった。

担任教員や授業担当者が、生徒を理解する上で、精神科医、臨床発達心理士などの専門家から得られた情報は有用であった。共有した情報を生徒指導に生かすことで、高校生活にスムーズに慣れさせることが可能となり、生徒の心理面での安定につながっていくと考える。

#### ②キャリアガイダンス

「キャリアガイダンス」で高校に入学したばかりの生徒に対して、将来の進路について目を向けさせることは難しい。しかし、この時期に外部機関から「働く」という視点で講演会を行うことで、進路に対する意識づけを行うだけでなく、高校生活をどのように過ごしていくべきなのか考えるきっかけとなったことは重要である。また、第2学年では具体的な進路先である大学や専門学校、企業などを訪問して知識だけでなく、1年後の進路に向けた準備を意識させることも大切であった。第3学年では直接の進路決定に向けた実践的な指導が始まるが、その上で社会人となったときに必要なマナーやお金の使い方、自立した生活をする上でのシミュレーションを行うことの重要性を改めて実感できた。さらに進路がなかなか決まらない生徒に対して若者サポートステーションの職員が月2回、来校して面談を行うことで生徒を直接サポートするとともに、卒業後に就職等で問題を抱えたときに相談できる専門機関の存在を知ることは重要である。また、若者サポートステーションの職員との面談結果を、担任教員へフィードバックすることにより、担任教員が知らなかった情報を得ることができたことも大きな成果であった。

#### ③ライフ・スキル・トレーニング

体験学習Ⅱ「ライフ・スキル・トレーニング」では、清掃活動を基軸においた授業を実施した。その結果、履修した生徒がその後、アルバイトやインターンシップなど実際に清掃活動を社会で行う場面で、その仕事の丁寧さを褒められ、自己肯定感を高める事例が見られた。

また、こだわりが強く、他者とのコミュニケーションが苦手な生徒が、授業の最終回に近くにつれて誰とでもチームを組んで清掃活動を行うことができるようになった。授業では専門的な知識を持った市民講師と教師とがティーム・ティーチング方式をとり、基軸活動である清掃の指導では市民講師が中心に行い、教師が学習評価を担当することで多面的な指導ができた。今年度の「ライフ・スキル・トレーニング」では昨年度の市民講師が変わり、清掃活動の位置づけが曖昧となり、担当教師が戸惑う場面も見られたが、キャリアエンカレッジ推進資料作成委員、市民講師、管理職、担当教師と再度授業の進め方について検討を行うことで修正を行った。その中で、担当教師から改めて清掃スキルの重要性などを再確認できたことは大きい。今年度の特徴としてセルフモニタリングする力を育成するために、班ごとに他人の行動をモニタリングすることで、自分を振り返るきっかけとすることができた。

今回の研究で「ライフ・スキル・トレーニング」の受講人数10人以下が最適であり、市民講師が実習指導を行い、教師が評価を行うティーム・ティーチングで行う指導が適切であると考える。また、こだわりが強く、他者とのコミュニケーションが苦手な生徒が、他の生徒と協働作業を行うことで、特別支援学校高等部学習指導要領第6章第2款の3人間関係の形成の指導内容を高等学校学習指導要領総則第5款5(8)「個々の生徒の障害の状態等に応

じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。」として行うことができた。このように「ライフ・スキル・トレーニング」は小・中学校における通級指導相当の指導と同様な教育的効果があった。

受講に適した生徒像としては

#### ④ワーク・チャレンジ・プログラム

体験学習Ⅱの「ワーク・チャレンジ・プログラム」は2時間連続の授業として行うことで、最初の時間にバズセッションや市民講師とのディスカッションを通じて、「会社とは?」、「学生と社会人の違い、人事考課について、働く目的を考える」、「主体性とは?服装・身だしなみに関する規則、終業時間に関する規則」、「あいさつに関する規則、返事に関する規則、お辞儀」、「社会人の言葉づかい、指示に関する規則、対人距離」、「傾聴スキル、話しかけるタイミングを掴む、話を聞く態度とは」、「質問に関する規則、メモ取りと復唱確認、質問の答え方」、「ビジネスマナーとは?報告に関する規則、報告・質問・連絡・相談に関する規則」「職場の物品に関する規則、5S活動」、「情報セキュリティ、情報管理に関する規則」、「依頼するとき・断るとき、評価用シートの記入、報告書作成、振り返りスピーチ」を指導した。その中で市民講師は一人一人の学習方法を確認しながら、一人一人に個別に指導を行った。2時間目には前時間に学んだ規則やスキルを実践する場面として、ワークサンプル幕張版の教材を使い様々な作業（ナプキン折り、重さ計量、プラグタップ組み立て、ラベル作成）などを行った。また、作業を通じて自己の特性について考えるきっかけとした。テキストとして障害者職業総合センターが作成した「職業リハビリテーションのためのワーク・チャレンジ・プログラム（試案）－教材集－」の一部を使用した。

体験学習Ⅱ「ワーク・チャレンジ・プログラム」ではハローワークから派遣していただいた職員の方を市民講師として、本校の教師とティーム・ティーチング方式として指導した。市民講師の方は民間企業の人事経験があり、企業における人材育成の視点で指導を行った。人材育成の視点では一人一人の特性に応じた個別の指導を行う点が学校教育で行われる一斉授業とは大きく違う。こうした指導を通じて受講開始時に自己評価が低かった生徒が徐々に自信をつけ、終了時には学校生活の様々な場面で自分の意見をはっきりと述べられるようになり、就職活動など進路活動に意欲的に取り組むようになった。また、報告について学んだ後、アルバイト先などでそれまで悪い報告事項についてはごまかしていたと言っていた生徒が、悪い報告事項でも報告することで、叱られるのではなく、周りの人間がフォローしてもらえることに気付き、きちんと報告することの大切さを実際の場面で学んだ。その他にも、質問の答え方を学び、相手に対して質問することで会話が成り立つことをアルバイト先で実践し、良かったと報告してくる生徒がいた。

このような成果から「ワーク・チャレンジ・プログラム」の指導が学習指導要領総則第5款4について障害の有無に関わらず必要な職業教育（総則第5款4（1））を実践する上で可能となった。

#### ⑤スタディガイド

第1、2学年では作業学習を中心に義務教育段階の国語、数学、英語の教材を用いて学習した。第3学年では進路に向けた入試問題、就職試験問題などから10分間に集中できる問題を精選し、学習に対する動機づけに基づいた学習を行った。こうしたドリル形式や書き写しなどにより集中力を養い、学習に向かう姿勢を育成できた。また、学級担任が個別の指導

を行うことで、一人一人の生徒への指導が行き届き、一人一人のつまづいている箇所を把握することができた。こうした一斉授業ではなく、個別指導を行うことで、生徒の学習理解を助け、各自のつまづき箇所を的確に把握し補強することで、学習意欲を喚起するとともに、3ヶ年の学習計画を通じた着実な基礎学力の定着により、社会で生きていくための基礎的な力をつけ、進路選択肢の拡大と進路実現を引き出すことができた。

また、副次的なものであるが、基本的に毎日実施されるため、生活習慣が乱れがちな生徒に対して家庭への連絡は必然的に緊密となり、学級担任と家庭との情報共有も進み、相互が連携した生徒の健全育成にも効果が現れている。このことは特別支援学校高等部学習指導要領第6章第2款の1にある1 健康の保持（1）生活のリズムや生活習慣の形成に関することについての指導として有効であった。

## （2）実施上の問題点と今後の課題

### ①メンタルヘルス面談

面談に時間がかかるため、日程を工夫して調整する必要がある。また、専門家を交えた事後の会議において得られた情報を、担任教員及び教科担当者が生徒指導に一層生かす必要がある。

### ②キャリアガイダンス

「キャリアガイダンス」では組織的な対応が課題として残った。学校の分掌である進路指導部は第3学年の直接の進路を決めることが一番重要視され、第1、2学年の進路指導は学級担任の中の進路指導担当が行うことになる。本校の特色である2人担任制では3年間担任が持ち上がるのが少なく、そのため進路担当が年度によって変わることがたびたび起こる。そのため、3年間を通じた系統的な進路指導が難しく、年度ごとの単発的な指導になってしまう。今後は「キャリアガイダンス」の計画や指導についてはキャリアガイダンス委員会として担当者が関わり、その中に外部機関、管理職を含めていくことが必要である。また、外部機関を含めることで様々な資源を活用したより系統的な進路指導を行っていくことができると考える。

### ③ライフ・スキル・トレーニング

「ライフ・スキル・トレーニング」では清掃活動に対する動機づけが難しい。そのため、今年度は清掃道具を新たに購入し、普段使っている清掃道具とは別の道具を使ったり、受講生の選出にあたり、希望順位の高い生徒を選び出したりした。しかし、こうしてスクリーニングした生徒の中には行動に落ち着きがない生徒、黙々と地味な作業をこなせない生徒がおり、そうした生徒の中には、基軸活動である清掃活動の意義を前向きに捉えることができず苦慮する場面が見られた。この反省をふまえて後期の受講生の選出にあたり、希望者から清掃活動という地味な活動を嫌がらない生徒で「ライフ・スキル・トレーニング」により効果があがると思われる生徒を選び出した。「ライフ・スキル・トレーニング」では清掃活動を基軸にすることがポイントであり、そこからコミュニケーション力、協働作業をする力をつけることを目的としているので、清掃活動に対して地道に取り組ませることが肝要である。

#### ④ワーク・チャレンジ・プログラム

「ワーク・チャレンジ・プログラム」はでは第2学年で履修を終了するため、卒業後の進路に結びつけていくためには第3学年で指導の継続が重要となる。せっかく身に付けたビジネススキルを実際の社会の場面で活用するため、インターンシップなどを活用することが重要である。今年度の春季休業日中にインターンシップを履修した生徒に呼びかけたが、参加者は少なかった。参加者を増やすためには学期末を活用したインターンシップを実施することが必要であると考ええる。

#### ⑤スタディガイダンス

義務教育段階の学び直しをドリル形式などで行うため、内容は既習事項の活用が原則となる。教材作成に当たっては、この原則を踏まえ、各教科は問題を作成したり、就職・進学に係る問題を精選したりすることとなる。こうした制約の多い中での教材研究であるため、教材が同じような内容に偏ることがある。そうならないためには学年担任だけでなく各教科が研究を重ね、義務教育段階の基本的な教科内容の研究、就職・進学に関する情報収集と問題検討を充実させることが求められている。また、教科は学年で進行していくとはいえ、入学後のできるだけ早い時期に卒業後を見据えた系統だった教材開発を行うことは生徒の発達段階に応じたキャリア形成を促すことになる。「スタディガイダンス」と「キャリアガイダンス」を両輪とした本校のキャリア教育全体像の構築が今後の課題である。